

「土佐紙業の恩人」没後100年 村上 弥生

吉井源太には、俳諧のときにする名前である俳号の「半仙」と、絵画の時に使う雅号「得一樓」、または「五厘庵」があった。これらの名前について考えてみよう。

半仙の「はんせん」は「半銭」にも通じる。つまり一銭の半分で五厘。ここから雅号の五厘庵をつけたのではないだろうか。

またもう一つの雅号の得一樓は、源太が幼名「徳一郎」だったことからつけられたと思うが、この字を見て、高知の人であれば有名な料亭、得月楼が連想されないだろうか。高知の人で、この欄に協力いただいている、ライターの久保慧菜さんも同じ意見だった。

とは頓知やユーモアなどをまじえて句を作るものだったし、源太はそのセンスを持ち合わせた人だった。

たとえばこんなことがあった。明治三十六（一九〇三）年に、丸一合資紙会社という、伊野にある大きな紙商へ半切紙を買いに行った。

それは源太の予想を超えた高い値段だったらしい。普通ならば一円だろうと思われるその紙が二円だったというので、日記には「あまりの高値なので一句をつけて代金を送った」と書かれている。その句とは次のようなものだ。

二円とは 余り天工の鼻高紙 まる一円のおらの半切

句の意味を正確に解釈することはできないが、高価

だった典具貼紙の高さと天狗の鼻の高さをかけ、また「まる一円」の中には「丸」がかけられているとい

うことだろう。典具貼紙のことが日記の中では、天具や天工と書かれていることはしばしばある。



半仙の俳号を入れた自筆の掛け軸。人物は自画像か（いの町紙の博物館蔵）

このように、人を和ませるような面があったことは、人からの協力を得たり、円滑に事業を進めていく上で役に立つものだったのではないだろうか。

日記のページの隅にちょっとした絵が描かれていることが多い。このような時の絵の題材は、やさしげな花や、布袋さんのような太鼓腹の人が寝そべっている姿などが多いのだ。源太は花も好きだったよう

で、日記の中には色々な人が花を持ってきてくれたこともよく書きとめている。こういった情のある人だった。

ここで少し、丸一合資紙会社というものを説明させていただきます。明治十三（一八八〇）年に伊野町の紙商が集まって丸一組合と

いうものを作った。同二十六年（一九一三）年には丸一合資紙会社という法人になる。同三十七（一九〇四）年には紙商の上田合名会社と紙製造業の伊野精紙合資会社の二社が加わって、土佐紙合資会社が設立される。

この伊野精紙合資会社の支配人は源太とも親しい、高い技術を持った紙漉職人の土居喜久弥という人だった。源太と同じように、和紙の紙質向上や販路拡大が必要だと考えて、この会社で働いた。この土佐紙合資会社は、明治三十九（一九〇六）年に円網抄紙機を取り入れ、日本で最初に和紙を機械で漉いた。

（京大大学院研修員、京都府在住）